

早期発見 妊婦健診から

子どもの心臓病

病院の 実力

*兵庫編 100



「疾患の早期発見が大切」と語る大嶋部長（神戸市中央区で）

心臓はそれぞれ二つの心室、心房からなり、決まった経路で血液を循環させ、体の

隅々にエネルギー源となる酸素を届けています。全身に血液を送り出す左心室はポンプの役割を果たす厚い筋肉を持ち、心室と心房の間には逆流を防ぐ弁があるなど、役割に応じた構造をしています。

先天性心疾患の患者は、左右の心室の間に穴が空いていたり、血管が左右で逆になっていたりするなど様々な症状

県立こども病院心臓血管外科

大嶋義博部長

医療機関ごとの治療実績を紹介する「病院の実力」は今回、先天的な「子どもの心臓病」がテーマ。重篤な症状では治療に一刻を争うケースもあり、早期発見が何より大切という。検査や治療の方法などについて、県立こども病院（神戸市中央区）の大嶋義博・心臓血管外科部長（59）に話を聞いた。

（松田俊輔）

隅々にエネルギー源となる酸素を持っていきます。そこで、欠損部位を修復するなど本来の役割を取り戻させることを基本的に、治療の計画を立てます。

治療は外科手術が主流。心室を隔てる壁に穴が空いた「心室中隔欠損症」では、おむね数時間程度で手術が済みますが、病態が複雑な「フアロー四徴症」などになると、6時間ほどかかることもあり、体への負担も大きいため、手術の緊急度合いを医師が判断し、数か月から数年間成長を待って手術を行うこともあります。

ただ、血液の循環がうまくいかず酸素不足になっている場合など、命が危険にさらされるケースでは、生まれた直後に手術に取りかかります。医師が病態を正確に把握する

ためにも早期発見が重要です。

そのために有効なのが妊婦健診時のエコー検査。産科医が心臓の構造の異常や心雑音などをチェックします。ただ、すべての産科医が疾患に対し、十分な経験を持っているわけではない。不安がある場合や、産科医が判断を迷うケースでは紹介状を書いてもらい、循環器の専門医を受診してください。

先天性心疾患の原因は、妊娠中の風疹ウイルスへの感染や、薬の副作用などを除き、多くが不明ですが、自分を責める母親も少なくありません。告知時には、症状などを隠さずに伝えて不安を取り除き、複数の治療の選択肢を提示するようにしています。

子どもの20年、30年後を考えた治療方針を立てる必要がありますが、子どもはまだ小さく、自分で意思を示せないため、すべての判断を両親が下さなければなりません。簡単なことではありませんが、我々医師も寄り添いながらサポートしていきます。